

## 自閉症スペクトラム障害児の社会的行動の形成に関するソーシャルストーリー™の効果

The Effects of Social Stories on Improving Social Behaviors of a Student with Autism Spectrum Disorders

○岡田信吾\*・大竹喜久\*\*・柳原正文\*\*・藤原継道\*\*\*

Shingo OKADA, Yoshihisa OHTAKE, Msafumi YANAGIHARA, Tsugumiti FUZITA

(兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科\* 岡山大学\*\* 兵庫教育大学\*\*\*)

Joint Graduate School in the Science of School Education Hyogo University of Teacher Education\*,

Okayama University\*\*, Hyogo University of Teacher Education\*\*\*

## I 研究の目的

ソーシャルストーリー™は、社会的状況が読み取れない、あるいはその状況を過って解釈してしまうことが原因で適切な行動がとりにくいと考えられる人を対象に用いられる手法の1つである。社会的な状況やその状況に関わる他者の気持ち、求められている行動など本人たちが見落としている情報を含む指導用の単文(ソーシャルストーリー™, 以下ストーリーとする)を作成し読ませることで、問題行動の減少や適応行動の促進が期待できるとされている(Gray, 2004)。ソーシャルストーリー™による介入は作成された文章を読ませるだけであるため、指導者に特別なテクニックや訓練が要求されることはない。また、ストーリーは大抵の場合400字未満のため、指導のために必要な時間も極めて短い。これらの理由から、学校や施設など多くの実践現場で使用されている手法である。先行研究ではこの介入方法は適切な行動形成(例えば Delano & Snell, 2006), 問題行動の減少(例えば Kuoch & Mirenda, 2003)といった標的行動に対して効果があるとされている。しかし、この介入方法において最も重要と思われるストーリー自体の検討についてはほとんど研究されておらず、Okada, Ohtake, and Yanagihara (2006)による、「AD/HD児のトイレの後における石けんを使った自発的な手洗い」について、特定の見解文の有無が標的行動の安定した生起に影響を及ぼすという報告が1例あるのみである。同時に、この報告では見解文の記述内容も標的行動の生起に影響を持つことが示唆されている。

今回の研究の主たる目的は、Okada et al.(2006)によって確認された特定の見解文の有無が標的行動へどのような影響をあたえるのか検証することであった。あわせて、標的行動の計測場面をストーリー提示直後の朝の会と約3時間後の給食とに設定し、ストーリーの提示時期の適切性についての検討を行うこととした。

## II 方法

**被験者:**被験者はA養護学校に在籍する寺野君(中学部2年生男子)であった。寺野君は知的障害軽度で、小学4年生の時に小児精神科医により自閉症の診断を受けていた。寺野君は小学校中学年程度の漢字が使われた400文字程度の文章を初見で読めることができた。また、意味もほぼ間違いなく理解できることが確認されていた。

寺野君は学校生活への適応状況は良く、パニックや深刻な他害行為や自傷行動などは学校では観察されていなかった。指導前の本人への聞き取り調査と行動観察では、特定の教員に愛着を示すことはなかった

が、特定のクラスメイトと話をしたり一緒に遊んだりしたいと答え、日常観察でもそのクラスメイトと頻りにDVDを見たりMDを聞いたりしている場面が観察された。DVDについては稀に担任教師にも一緒に見ようと誘いかけることがあった。

**標的行動:**標的行動は朝の会と給食時の着席行動の改善であった。標的行動の操作的な定義は、両方あるいは片方のひじを机についていることと、頭が著しく机に近づいていることであった。この標的行動は、寺野君の社会的な受容を向上させるために設定された目標で、担任教師と保護者の同意の上で指導は開始された。

**実験計画:**実験計画はベースライン条件、ストーリー1(見解文なし)条件、ストーリー2(知らない教員の行動の結果に対する評価あり)条件、ストーリー3(担任教員の行動の結果に対する評価あり)条件の4条件からなるABCD Aデザインを実施した。

**ソーシャルストーリー™:**ストーリーはすべて寺野君の学級担任である第1筆者によって作成され、ソーシャルストーリー10.0™(Gray 2004)の基準に準拠して作成された。作成されたストーリーは第1筆者とともに寺野君を担任する教員と第2筆者の大学教員の確認を経てから実際の実験に使用された。

**実験手続き:**インターベンションは、教室と同じ階の調理室と自立活動準備室で実施された。当初の予定では調理室のみを使用してインターベンションを行う予定であったが、調理室は時おり人の出入りがあり、「気が散る」と寺野君が訴えたため、途中から隣の自立活動室に変更された。インターベンションはGrayの推奨する「Jimmy Cricket Position」に準拠して行われ、支援者は寺野君の視界に入らないように後方に座り(自立活動室では場所の都合で寺野君の後ろに立った)、落ち着いた雰囲気の中で見守った。寺野君の読み間違いに対しては最小限度の訂正を行った。読み方を間違えても意味が変わらないような間違いに対しての訂正は行われなかった。また、音読中に3秒以上止まった時には、音読が止まった前の文節を教師が音読し、続けて寺野君に読ませた。実験の手続きは全インターベンションの25%の割合でビデオカメラにより録画され、実験手続きの信頼性が計測された。

また、筆者以外の学級担任にはベースライン期もインターベンション期も声かけの仕方や指導に関しての条件を変更しないように依頼した。また、実験計画や条件変更などは知らせなかった。

**結果:**現在、実験は継続中であるため、本論において結果の報告はできない。